劉楨贈答詩論

龜山　朗
高知大學

一　はじめに

建安贈答詩の主要な作者としては、曹植・王粲・劉楨の三人の名前を擧げることができる。そのうちの曹植と王粲については、わたくしは先にいちおうの検討を終えた。[1] 本稿は、殘る一人である劉楨の贈答詩について、その詩歌史上の位置づけを試みようとするものであるが、はじめに劉楨が三人の中ではきわだって特異な詩人であるということについて一言し、本稿で論ずべき問題點がどこにあるのかを明確にしておきたい。

周知のごとく、古來、詩人劉楨に對する評價にははなはだ高いものがあり、曹植につぐ存在として、しばしば王粲と併稱されてきた。[2] そのことは、傳存する劉楨の詩歌作品の少なさ（數え方にもよるが、ほぼ完全な姿をとどめていると認められるのは、わずか十篇にすぎない）からすると、むしろ意外な感すら覺えるのだが、そうした評價をかち得た大きな理由として、その作風の特異さが指摘できると思う。特異さといえば、謝靈運は「擬魏太子鄴中集詩八首」において劉楨を「偏人」と評し、劉勰もまた、「公幹は氣褊たり」（『文心雕龍』「體性篇」）と評したが、この「偏」という評言は、その詩歌作品に當て嵌めてみることも可能ではなかろうか。

たとえばまず、五言詩への偏りがある。すなわち、現存する劉楨の詩歌作品は、四言の斷句が二例計三句殘っている以外は、すべて五言詩である。『文心雕龍』「明詩篇」では、四言と五言の双方に秀でているのは曹植と王粲であるとしたうえで、「偏りて美きは則ち太仲・公幹」という。

だが、それ以上に重要な偏りとして見逃せないのが贈答詩への偏りである。すなわち、詩題に贈答詩と明示するものとしては、「贈五官中郎將四首」「贈徐幹」「贈從弟三首」

（これは三首で一篇の作品とみなすべきだ）の六篇があり、斷片として傳わる例を除けばそれですべてなのだが（後に述べるように「雜詩」も贈答詩であった可能性がある）、他の主要な建安詩人の場合に比して、詩歌作品全體の中で贈答詩が占める比率が格段に高いことは、特筆されねばならない。

その點に、曹植との違いも指摘できるであろう。なるほど曹植の五言詩においても、贈答詩がきわめて重要な位置を占めているのは確かである。しかし、贈答詩に偏っているとはいいがたい。曹植の場合、その才能は、贈答詩以外の分野でも多彩に花開いている。それに對して劉楨の五言詩の世界は、絶對數が少ないので斷言はできないものの、いかにも狹く、しかもその主要な部分が、贈答詩によってほとんど代表されているのだ。劉楨にとって贈答詩が、特別に大きな意義をもったジャンルであったことは、まず疑いのないところである。

そればかりではない。劉楨の贈答詩自體にまた、ある偏りが認められる。先取りしていってしまえば、劉楨の作品は、當時の贈答詩の平均的な在り方から最も隔たったところにまで行き着いているように思われる。「氣」の詩人劉楨の本領は、贈答詩のジャンルにおいてこそ、最もよく發揮されているといえそうである。まさにそのことによって、劉楨は詩歌史の大きな流れを推し進めるうえで、一定の役割を果たしえたのではなかろうか。

こうした見通しに大きなあやまりがないとすれば、われわれが取り組まなければならない課題は要するに、劉楨の贈答詩がどのような點で特異であるのかをいかに正確に理解するかに絞られるであろう。以下、その問題を中心に、實際の作品に卽して考察を進めよう。

二　「贈從弟三首」をめぐって

はじめに取りあげるのは、劉楨の代表作とみなされることの多い「贈從弟三首」である。まず全篇を掲げる。

〈其一〉

汎汎東流水　　汎汎たり東流せる水（かわ）
磷磷水中石　　磷磷たり水中の石
蘋藻生其涯　　蘋藻　其の涯（きし）に生ず

華葉何擾溺　華葉　何ぞ擾溺たる
采之薦宗廟　之を采りて宗廟に薦め
可以羞嘉客　以て嘉客に羞む可し
豈無園中葵　豈に園中の葵無からん
懿之出深澤　之の深澤より出づるを懿す

〈其二〉

亭亭山上松　亭亭たり山上の松
瑟瑟谷中風　瑟瑟たり谷中の風
風聲一何盛　風聲一に何ぞ盛んなる
松枝一何勁　松枝一に何ぞ勁き
冰霜正慘悽　冰霜正に慘悽たるも
終歲常端正　歲を終えて常に端正なり
豈不罹凝寒　豈に凝寒に罹わざらんや
松柏有本性　松柏　本性を有てり

〈其三〉

鳳凰集南嶽　鳳凰　南嶽に集りて
徘徊孤竹根　孤竹の根に徘徊す
於心有不厭　心に厭かざること有りて
奮翅凌紫氣　翅を奮いて紫氣を凌えんとす
豈不常勤苦　豈に常に勤苦せざらんや
羞與黃雀羣　黃雀と羣るるを羞ず
何時當來儀　何れの時にか當に來儀すべき
將須聖明君　將に聖明の君を須たん

この詩の大きな特徴が、「比體を通用」する寓意的な作品であるということは、あらためて指摘するまでもない。③ところがそのような例は、他の建安贈答詩には見當たらず、その點にまず、この詩の特異性が認められる。また、一首が八句によって緊密に構成されているということも、當時の詩歌作品全體を見渡して、まだそれほど一般的ではなかったと考えられるうえに、それが三首連ねられているというのは、注目に値することである。

そうした形態上の特徴を「贈從弟三首」が備えているということをどう理解するかがひとつの課題になるだろうが、議論の都合上、まず最初に、この詩が從來どのように讀まれてきたのか、讀まれ方のポイントはどこにあったのか振り返っておきたい。

その際、どうしても見過すことができないのが、この作品の解釋を方向づけるうえで、「贈從弟」という詩題がいかに大きなはたらきをしてきたかということである。すなわち、この詩の解釋を支えてきた最も基本的な枠組みをいうなら、從弟を受け手とするところの贈答詩であるということになろうが、そうした枠組みを提供するのは、實は、詩題以外にはない。從弟なる人物については何ひとつ分かっていないけれども、しかしともかく詩題があるからこそ、人々は、詩にうたわれる「蘋藻」「松」「鳳凰」を、從弟と何らかのかたちで結び付けてみるという方向で、解釋を進めることができるのである。

かくして、たとえば、從弟はいまだ無名であること、しかし、どこに出しても恥ずかしくない高潔な人物であること、どのような逆境に在っても變わらない節操を保持していること、いまは不遇だが將來必ずや世に出る機會に巡り會えるであろうと見込まれること……等々のことが推測可能となり、その結果、この詩は、從弟の置かれている現實の状況を踏まえつつ、從弟のすぐれた人格をたたえ勵まし、かつ將來への期待を述べて、その現在の不遇を慰めようとした作品であるという一つの結論に到達しうるのである。ここで參考までに、そうした方向でなされたと考えられる先人の解釋例を、二三擧げてみよう。

何焯『義門讀書記』（文選卷二）：「首章は其の潔を致すなり、次章は其の節を厲ますなり、三章は其の幾（とき）を擇ぶなり。」

陳祚明『采菽堂古詩選』（卷七）：〈其一〉「此の首、其の潔清を言う」、〈其二〉「此の首、其の正直を言う」、〈其三〉「此の首、其の高遠を言う」。

張玉穀『古詩賞析』（卷九）：「首章は蘋藻を以て比し、清修の必ず用いらるるを慰むるなり。」「次章は松柏を以て比し、勁節の當に特立すべきを勉（はげ）ますなり。」「末章は鳳凰を以て比し、盛德の宜しく養晦すべきを戒むるなり。」

なお、こうした解釋が、「贈從弟三首」は三首全體で一つの作品を構成しているのだとする基本的な捉え方のうえに成立しているということも、ここで念のために確認して

おきたい。となれば、劉楨は三首によって何か特別な構成を意圖したのか、いま一歩踏み込んでみたい氣になる。しかし、詩を贈ることになった背景はおろか、從弟に關する情報すら皆無であってみれば、明確な意圖を讀み取るのは結局無理なようである。ここに擧げた三人の評者にも、それを何とか讀み解こうとする意欲は窺えるが、これという答えを見つけだすには到っていない。だが、それにしても、三首を有機的に關連づけて讀む讀み方のほうが、この作品に、從弟なる人物を受け手とする贈答詩としての、より大きな機能を果たさせることになるのは確かであろう。

「贈從弟三首」は、從來、おおむね以上のように讀まれてきた。それは考えてみれば、かなり面白いことではないだろうか。なぜなら、「贈從弟三首」は形態的にはなはだ特異な作品であるが、その讀み方自體は、他の建安贈答詩の場合と特に大きく變わるものではなかったということになるからである。

だが、そうした讀み方が「贈從弟三首」にとって唯一絶對であるかというと、決してそうではあるまい。繰り返しになるが、そうした讀み方は、あくまでも詩題に全面的に依存することによって可能となったものだからだ。しかしこの詩を鑑賞するうえで、詩題はほんとうに必要不可缺なのであろうか。

そこで次に、時代は少し遡るが、「贈從弟三首」と同じように比體を通用した寓意的な贈答詩である、朱穆（一〇〇～一六三）の「與劉伯宗絶交詩」との比較によって、「贈從弟三首」の寓意詩としての特徴を探り、あわせて贈答詩に寓意の手法を用いるというのがどういうことなのか、考えてみたい。「與劉伯宗絶交詩」は次のようにうたわれている。

北山有鴟　北山に鴟有り
不潔其翼　其の翼を潔くせず
飛不正向　飛ぶに正向せず
寢不定息　寢ぬるに定息せず
饑則木攬　饑うれば則ち木に攬り
飽則泥伏　飽くれば則ち泥に伏す
饕餮貪汚　饕餮の貪汚たる

臭腐是食　臭腐を是れ食す
塡腸滿嗉　腸を塡たし嗉を滿たし
嗜欲無極　嗜欲極まること無し
長鳴呼鳳　長鳴して鳳を呼び
謂鳳無德　鳳を德無しと謂う
鳳之所趨　鳳の趨く所
與子異域　子と域を異にす
永從此訣　永えに此れ從り訣れ
各自努力　各おの自ら努力せん

この詩は『後漢書』卷四十三李賢注に引かれており、そこにはまた、詩とともに劉伯宗に出されたと考えられる書簡も載せられている。それによれば、朱穆はかつて劉伯宗に恩義をかけたことがあったのに、劉伯宗の方が身分が高くなったいまでは、劉伯宗は朱穆に對して尊大な態度をとるようになったので、朱穆は腹にすえかね、絶交を申し渡すに至ったという。

そうした書簡の具體的な記述とは對照的に、詩において朱穆は、惡鳥である「鴟」のあさましい姿を描寫したうえで、そうした「鴟」が、德高き「鳳」にちょっかいをだしてきたのに對し、「鳳」がきっぱりと訣別の言葉をなげつけるという場面をうたっているわけである。

さて、この詩と「贈從弟三首」とをくらべてみると、人間の事象から任意に一部分だけを切り出し、それを動植物の世界に託して一般化したかたちで表現する寓意の手法（それは一種の誇張法と理解できる）を基本として出來上がっているという點で、兩者が共通するのはいうまでもないが、しかし、寓意表現の內實に相當な違いがあることもまた、容易に看取されると思う。

まず「與劉伯宗絶交詩」の方からいうと、「鴟」が劉伯宗という特定の相手を寓していることは意圖的に露呈されており、まさにその點に、この詩の存立がかけられていると考えられる。もちろんここでも、詩題があるからこそ、「鴟」が劉伯宗を寓しているとわかるわけだが、よしんば詩題がなかったとしても、特定の相手を罵倒するという、はなはだ現實的な目的に添うように、鳥（鴟）と特定の個人（劉伯宗）とがぴったりと重ね合わされていることは、明白

に讀みとれるであろう。ある人物を戯畫化するために「鴟」が選ばれたわけで、作品世界では、その人の顔をした「鴟」、ないしは「鴟」に變身させられたその人が、誰の目からもその人とわかる姿で動き回っているのである。

「與劉伯宗絶交詩」においては、事柄を一般化する寓意の手法を用いているとはいえ、作品と特定の個人との結び付きは絶對的である。「鴟」に寓されているのがその人以外の誰かと取られたのでは困るのだ。贈答詩は一般に、強い對人意識、すなわち作品はそれを受け取る相手との固有の結び付きにおいて成立するものであるという意識のもとに作られているが、「與劉伯宗絶交詩」も、對人意識の強さという點では少しもひけをとらないわけである。

寓意表現は、個を普遍的な座標上に移して議論するものともいえようが、「與劉伯宗絶交詩」においては、それはあくまでも個（劉伯宗）の特殊性（惡しき一面）を誇張するための手續きとして作者の意圖に奉仕しているのだ。贈答詩における寓意表現のひとつの典型的な在り方が、ここには示されているといえる。それに對し、「贈從弟三首」においては、個（從弟）は普遍的な座標軸のなかに埋没したまま、なかなか立ち現われてこないのだ。「與劉伯宗絶交詩」とくらべるとき、「贈從弟三首」に示される對人意識はかなり希薄であるといわざるをえない。そのことは「贈從弟三首」の寓意表現の基本的な特徴だと思われる。

そのことをさらに、建安七子の一人である應瑒の、寓意的表現を用いた部分を多くもつ作品「侍五官中郎將建章臺集詩」（『文選』卷二十）を見ることによっても、確かめてみたい。（應瑒のこの作品は公讌詩に分類される。先述したごとく、建安贈答詩中には、比體を通用する寓意的な作品は見當たらない。しかし公讌詩は廣義の贈答詩とも考えられるので、比較の對象として取りあげる。）

朝雁鳴雲中　　朝雁　雲中に鳴く
音響一何哀　　音響　一に何ぞ哀しき
問子遊何鄉　　問う　子　何れの鄉に遊び
戢翼正徘徊　　翼を戢めて正に徘徊すと
言我寒門來　　言う　我　寒門より來たり

將就衡陽棲　將に衡陽に就きて棲まんとす
往春翔北土　往春は北土を翔け
今冬客南淮　今冬は南淮に客たり
遠行蒙霜雪　遠く行きて霜雪を蒙り
毛羽日摧頹　毛羽　日に摧頹たり
常恐傷肌骨　常に恐る　肌骨を傷り
身隕沈黃泥　身　隕ちて　黃泥に沈まんことを
簡珠墮沙石　簡珠　沙石に墮つ
何能中自諧　何ぞ能く中に自ら諧わん
欲因雲雨會　雲雨の會に因り
濯翼凌高梯　翼を濯ぎて高梯を凌がんと欲す
良遇不可値　良き遇(めぐり)　値う可からず
伸眉路何階　眉を伸ぶるに　路　何(いずく)にか階(よ)らん
公子敬愛客　公子　客を敬愛し
樂飲不知疲　樂飲して疲るるを知らず
和顏既以暢　和顏　既に以て暢び
乃肯顧細微　乃ち肯て細微を顧みる
贈詩見存慰　詩を贈りて存慰せらるるも
小子非所宜　小子の宜しき所に非ず
爲且極歡情　爲に且く歡情を極め
不醉其無歸　醉わずんば其れ歸ること無けん
凡百敬爾位　凡百　爾(そ)の位を敬み
以副飢喝懷　以て飢喝の懷に副わん

詩の後半に「贈詩見存慰、小子非所宜」とあるところから、この詩が、曹丕から詩によって何か言葉をかけられたのに對して、その答えとして作られたものであることが推測できるが、內容もまさに、それに相應しいものになっている。すなわち、ここで應瑒は、曹丕の主催する宴席に連なることができるようになるまでの自らの來し方を、安住の地を求めて各地をあてどなく經めぐってきたという「雁」の科白に託してうたったうえで、いまこの場に居れる幸せを感謝し、居竝ぶ羣臣とともに曹丕の期待にそわんとする決意を表明している。

この詩が應瑒から曹丕に向かって投げ返された作品であることに注意したい。つまり、宴集の場においては、あたかもキャッチボールのように、詩による對話が繰り廣げら

れたことが想像され、そのなかで寓意表現は、對話に興趣を添え、場の雰圍氣を盛り上げるはたらきをしていると考えられる。曹丕（および宴に連なる人々）は、「雁」が應瑒の顔つきをしていることにすぐに氣付いたであろうが、そのような抵抗ともいえないほどの抵抗をへて、投げ返された言葉は快く相手に受けとめられるわけである。

「侍五官中郎將建章臺集詩」からは、詩による賑やかな對話の場面が想像できる。當事者間の關係性に資するコミュニケーションの言葉として讀まれることを、作品自體が要求している。そのことは「與劉伯宗絶交詩」においても、基本的に同樣であろう。

だが、「贈從弟三首」の場合は、そうした方向から理解するのが困難なのだ。つまりそこから、何らかの個別的な状況のもとでの劉楨と從弟との對話の場面を讀み取ろうとしても、いまひとつうまくいかないのである。それも結局は、「贈從弟三首」の言葉には、對人意識が希薄であるからにほかなるまい。

いや、もうすこし正確にいうなら、けがれのない土地に人に知られることなく生い育った「蘋藻」を賛える〈其一〉と、卑小な黄雀と群れるのを嫌って孤高を保ちつつ自らの時を待つ「鳳凰」をうたっている〈其三〉については、從弟の個別的な状況との一定の對應を想定することが許されるようにも思われるから、「與劉伯宗絶交詩」や「侍五官中郎將建章臺集詩」の場合と同じ讀み方でも、ある程度までは對處できるであろう。だが、〈其二〉の場合は、いささか事情が異なるのではないか。

というところでここで、最近の詩歌選集が劉楨の作品を掲載する場合、ほとんど例外なくこの「贈從弟三首」を選んでいるのだが、その際、三首全部を載せずに〈其二〉だけで濟ませることが多くなっているという事實に注目したい。いうまでもなくそれは、三首の中では〈其二〉が傑出するという評價の確立を物語るものである。が、加えてそこでは、從來の讀み方とはいささか方向を異にする、三首が相互に關連性を有するという全體の構成には捕われない、より自由な讀み方が實踐されているとはいえないだろうか。

そうした期待のもとに〈其二〉のみを取り出している編

者達が、その詩をどのように理解しているのか、眼にしうる範圍で調べてみたところ、贈答詩であると同時に、松を對象とした詠物詩としても見ようとする態度が次第に有力になりつつあることがわかった。これははなはだ興味深いことである。④

もちろん、〈其二〉を詠物詩として見るといっても、その寓意性までが否定されているわけではない。「松」には寓意を認めざるをえない。だから、「松」に從弟の姿が寓されているとみることは、少しも妨げられない。あるいは、「松」に作者自身の精神の在り様が投影されていると取ることも可能であろう。

しかし一方、特定の何かに還元しようとしても、「松」のイメージ自體はいっこうに薄まりはしないというのもまた、嚴然たる事實なのではなかろうか。とすれば、〈其二〉のみを前にすることによって、そこに創造された「松」そのもののイメージを最大限に尊重するという讀み方、つまり、詠物詩として見る讀み方がでてくるのは、むしろ自然な成り行きといえるのではないか。

だが、その讀み方が、おそらくは作者の意圖を超えたものであるということは、いちおう注意しておかねばなるまい。作者の意識としてはやはり、前に述べたように、「贈從弟三首」は連作詩として作られたはずだからである。すなわち、比體を通用する一首八句の詩を正確に三首ならべるというのは、明らかに意圖的に行なわれたことで、それはこの作品の樣式性をいっそう高めており、「與劉伯宗絕交詩」「侍五官中郎將建章臺集詩」にはない大きな特徴となっている。そのことによって、個（從弟）との結び付きがある程度確保されていることも、すでに述べた。だから、かりに劉楨自身に質せたとすれば、〈其二〉もまた〈其一〉〈其三〉と同樣、從弟のことを念頭においてうたったのだという答えが、必ずや返ってくるものと思う。

ところがしかし、その一方で、樣式の確立が作品の自律性を高め、それが逆に個（從弟）に付き過ぎることを妨げる作用、つまり、個との間に一定の距離を保持させる作用を果たしているということもまた、否定できない。「贈從弟三首」における樣式の確立は、相反する兩樣の效果をもた

らしているわけだ。だから、作者の意圖に忠實に、三首を連作として讀むかぎりは、〈其二〉の詠物詩的性格は背後に隱れたままで、表面に出てくることは少ないのである。

一方、〈其一〉〈其三〉の場合はというと、もしも連作構成にとらわれないで讀むとしても、そこでの「蘋藻」や「鳳凰」は、〈其二〉の「松」にくらべると觀念性が強く、イメージのままに享受されるよりはむしろ何かに還元されることを、より強く要求しているように思われる。その意味で、〈其二〉と〈其一〉〈其三〉の間に完全な整合性が保たれているわけではない。（したがって「贈從弟三首」が連作詩としての完成の域に達しているとはみなしがたい。）

〈其二〉の寓意表現は、特定の個に還元されることを拒むほどに純化されているともいえよう。それは「古詩十九首」風の平易で素朴な表現を用いることによって、いい換えれば、個との繫がりを匂わせるような表現を排除することによって實現したものである。加えて、先述したように、緊密な對句が多用されており、それによって三首のなかではもっとも樣式性が高まり、かくして作品の自律性が、〈其一〉〈其三〉に比べて格段に强まっていることも見逃せない。その結果、作品そのものが、作者の意圖を超えて、松を描いた詠物詩としての讀み方を要求するにいたっているのではないか。わたくしはそのことを重視したいし、人人が三首のなかの、〈其一〉でも〈其三〉でもない〈其二〉に引きつけられる理由もまた、そこのところに在るに違いないと考えている。

＊　＊

つまるところ劉楨には、贈り手と受け手との關係性に資することを第一義とするという贈答詩の基本的な在り方には必ずしもこだわらないで、贈答詩をより自由な表現の場にしたいという傾向があったと見たい。そのひとつの成果として、贈答詩一般に適用しうるような讀み方では味わいきれない、特異な作品が創出されたのであろう。

そうした贈答詩制作に對する獨自な姿勢は、必ずや詩人劉楨の本質に深く根ざしていたものと思われる。だとすれ

ば當然それは、「贈從弟三首」のような作品を生みだすだけでは濟まなかったはずである。

三　「贈五官中郎將四首・其二」「同・其三」および「贈徐幹」について

一般に贈答詩というものは、制作と享受にかかわる特定の状況をじかに反映するかたちで成立している。ところが「贈從弟三首」の場合、實際の贈答の現場との繫がりは、全くといってよいほど不明であった。にもかかわらず、それは非常に高い評價を受けてきた。前章では、そのあたりの問題に焦點をあてて、その特異性について考えてみた。

だが、「贈從弟三首」〈其二〉のような、自律性においてほとんど完璧ともいってよい贈答詩は、いかに劉楨であっても、そう何時でも作れる代物ではなかっただろう。そもそも「比體を通用」する贈答詩が、朱穆「與劉伯宗絶交詩」的なレベルを出ること自體、決して容易くはなかったはずだ。

「贈從弟三首」は、劉楨にとっても、特殊な作品であったといわざるをえない。そして實際、「贈從弟三首」以外の劉楨の贈答詩を見てみると、若干判斷に苦しむ例がないわけではないが、原則的には、他の多くの建安贈答詩同樣、特定の贈答の現場と結び付けて讀むのが相應しい作品ばかりである。

しかしながら、そうした作品においてもまた、他の建安贈答詩にはない、劉楨ならではの特異性は、やはり確實に見て取れる。顯著な例としては、「贈五官中郎將四首」中の「其二」と「其三」、および「贈徐幹」を擧げることができる。本章では、それらを順を追って檢證することにより、劉楨にとって贈答詩が、いかなる意義を擔わされた表現領域であったのかを明らかにし、「贈從弟三首」から窺えた贈答詩制作に對する劉楨の獨自な姿勢との繫がりを考えてみたい。

まず「贈五官中郎將四首・其二」（以下、「其二」と略稱する）から見よう。

余嬰沈痼疾　　余　沈痼の疾に嬰り

竄身清漳濱　身を清漳の濱に竄せり
自夏涉玄冬　夏自り玄冬に涉り
彌曠十餘旬　彌曠なること十餘旬
常恐遊岱宗　常に恐る　岱宗に遊び
不復見故人　復た故人を見ざらんことを
所親一何篤　親しむ所は一に何ぞ篤き
步趾慰我身　趾を步びて我身を慰む
清談同日夕　清談して日夕を同じくし
情眄敍憂勤　情眄して憂勤を敍す
便復爲別辭　便ち復た別辭を爲し
遊車歸西隣　遊車　西隣に歸らんとす
素葉隨風起　素葉　風に隨いて起こり
廣路揚埃塵　廣路　埃塵を揚ぐ
逝者如流水　逝く者は流るる水の如し
哀此遂離分　此の遂に離分せんことを哀しむ
追問何時會　追問す　何れの時にか會せんと
要我以陽春　我を要つに陽春を以てす
望慕結不解　望み慕いて結ぼれて解けず
貽爾新詩文　爾に新詩の文を貽らん
勉哉修令德　勉めよや　令德を修め
北面自寵珍　北面して自ら寵珍せよ

一讀してわかるとおり、死を思うほどの重い病のために長く引き籠っていたのを、ひとりの友人がわざわざ見舞ってくれ、おかげで久しぶりに日頃の憂さを晴らすことができたと、友人への感謝の念を表明するのが前半。後半では、樂しい一時はたちまちのうちに過ぎ去り、いよいよ別れの時を迎える、そのときの心情がさまざまの角度からうたわれ、そして最後は、友人への勵ましの言葉で收束する。

このように、詩が、いつ、いかなるときに作られたかは、作品そのものが明快に物語っている。というのも、ここで主に取り上げられているのは、作者の日常生活にかかわる私的な事柄であって、その意味でこの詩は、まさに私信的だからである。贈答詩が公的な席での社交の道具として使われることの方がむしろ普通であった建安時代において、かくも私的な雰圍氣をたたえた贈答詩は、劉楨以外にはちょっと見當たらない。まずそのことを、この詩の第一の特

色として、指摘しておかなければならない。

しかし、だとすれば、曹操配下の一文人たる劉楨が、このようなある意味ではなれなれしい詩を、身分差の歴然としている曹丕に贈るということが、果たして可能であったのかという疑問が湧くのは、むしろ當然であろう。

實際そうした疑問が、つとに鈴木修次氏によって提起され、「其二」は曹丕に捧げられたものではないと斷じられた（『漢魏詩の研究』大修館書店・一九六七年）。

それに對する反論がないわけではないが、「其二」が曹丕に宛てて贈られたとは考えにくいという點に關しては、鈴木氏の説にくみせざるをえない。⑤（もしも曹丕に贈られたのであったとすれば、劉楨は曹丕に對してほとんど對等に發言していると考えられ、それはそれで、別の問題として注目されねばならないであろう。）が、ではそれがなぜ「贈五官中郎將」という題で括られて傳わっているのかについては、適切な答えを見出せない。いまは疑問は疑問として殘しておくしかない。

だがそれにしても、「其二」が、個人間の私的なやりとりとしての內實を備えた贈答詩であるということは、おそらく否定できない。ところで、そうした種類の贈答詩としては、われわれは先に、曹植の「贈丁儀」と「贈徐幹」について詳しく檢討したばかりである（拙稿「建安年間後期の曹植の〈贈答詩〉について」）。それらは從來の贈答詩の世界を擴大するうえで、はなはだ注目に値する作品であった。「其二」および、このあと檢討する「贈五官中郎將四首・其三」と「贈徐幹」への理解を深めるうえで、曹植の二作品が恰好の比較の對象となりうることは間違いない。

そこで、曹植のそれら二作品がどのような贈答詩であったのか、詳細は前稿にゆずるが、結論のみ簡單に繰り返しておくと、次のようになる。

「贈丁儀」は、相手（丁儀）がいま置かれている嚴しい狀況を、自分（曹植）がいかに深く理解しているかを披瀝したもので、丁儀との連帶感を確認し强化するための贈答詩であると考えられる。「贈徐幹」は、相手（徐幹）の現在の狀況に對する充分な理解に立って、さらにそこから一歩踏み込んで、徐幹に出仕をうながすべく、誠意を

こめて説得しようとした贈答詩である。

いずれも、當事者たち本人に直接かかわる事柄が取り上げられており、傳存する建安贈答詩の中ではまだ數が少ない、個人のための詩という性格が濃厚な作品であるというところに、その基本的な特徴が認められた。そこまでは、「其二」の場合も同様であると理解してよいであろう。

だが、ここで、「贈從弟三首」において問題となった、對人性ということに注意して見てみると、劉楨と曹植の間にはかなりの隔たりがあることに氣付く。

曹植の「贈丁儀」「贈徐幹」の方からいうと、そこでの作者の關心の在り處は、明白に、その詩を贈ろうとする相手の方に傾いている。つまり、作者は主に、相手のことをさまざまな角度からうたっているのである。

もっとも、特定の相手に宛てて贈る作品が、その相手のことをうたうことを中心にして出來上がっているというのはむしろ當たり前で、そのこと自體は、集團的に享受される贈答詩の場合であっても少しも變わらない。贈答詩全般に等しく認められる挨拶性や儀禮性が、そうしたところから生まれているということもまた、いうまでもないであろう。曹植の「贈丁儀」「贈徐幹」が他の多くの建安贈答詩と區別される理由は、それらが第一義的には特定の個人によって讀まれる作品であるがゆえに、表現がとおりいっぺんの挨拶にとどまらない、相手を深く思い遣った濃やかで懇ろなものになっているところにあるわけだが、受け手の方に重點をおいてうたっているという一事においては、いい換えれば、强固な對人意識を基本に据えているという點においては、贈答詩一般の在り方からけっして逸脱するものではないのである。

ところが劉楨は、まさにそこのところで、曹植と袂を分かっているのだ。

「其二」をもう一度見直していただきたい。なるほど詩の終結部においては、相手への激勵の言葉をはじめとする、いかにも贈答詩らしい表現があるにはある。しかし、「其二」からは、それを受け取る相手の姿がほとんど見えてこない。「望慕結不解、貽爾新詩文」という言葉が端的に示しているように、相手との對話としての發言というよりは、

劉楨からの一方通行的な心情の吐露の方に、どちらかといえば傾いている。つまり、表現者劉楨の主要な關心は、そのときの自分自身の心情をうたうことにあるのであって、曹植が「贈丁儀」「贈徐幹」で相手の立場を思いやった表現をしているのとは、明らかに違っている。そのことのもつ意味は小さくない。

いささか奇妙なことといえないでもない。が、「其二」は、その基本的な在り方をいうならば、それを贈る相手についてうたう贈答詩ではないのだ。その點からすれば、「其二」が誰にむけて贈られたのかがわかりにくいこと自體、この詩の基本的な在り方にかかわる特徴にほかならなかったわけだ。そうした詩が曹丕に宛てて作られたとするのは、いよいよむつかしくなったのではなかろうか。

「其二」が建安贈答詩のなかで特筆に値する大きな理由は、對人性よりも對自性の方を優先している點にある。それが「贈從弟三首」で見た對人意識の希薄さと無緣でないことはいうまでもない。

さて對人性よりも對自性を前面に押し出そうとする傾向は、「其二」のみならず、次に掲げる「贈五官中郎將四首・其三」（以下、「其三」と略稱する）にも見て取ることができるようだ。

秋日多悲懷　感慨以長嘆
終夜不遑寐　敍意於濡翰
明燈曜閨中　清風凄已寒
白露塗前庭　應門重其關
四節相推斥　歲月忽欲殫
壯士遠出征　戎事將獨難
涕泣灑衣裳　能不懷所歡

秋日　悲懷多し
感慨し以て長嘆す
終夜　寐ぬるに遑あらず
意を濡翰に敍す
明燈　閨中に曜き
清風　凄として已に寒し
白露　前庭を塗（うるお）し
應門　重ねて其れ關（とざ）せり
四節　相推斥して
歲月　忽ち殫きんと欲（す）
壯士　遠く出征す
戎事　將た獨り難からん
涕泣　衣裳に灑ぐ
能く歡ぶ所を懷わざらんや

この詩も、贈答詩として理解しようとすると、なかなかに困難な問題を含んだ作品である。その難しさは要するに、この詩のやり取りによって、贈り手と受け手との間に、どのような關係性がとり結ばれることになるのかが、はなはだ分かりにくいところにある。つまり、この詩に登場する主體は、秋の夜長をひとりで悲嘆にくれつつ過ごしている女性であって、だからこれは閨怨のスタイルを取る作品であると一應はいえるのだが、それが現實の状況とどのように對應するのか、簡單に答えが出てくるとは思われないのだ。

だが、この詩を解釋するうえで、その問題は避けて通れない。その際、手掛かりになりそうな表現として誰もが氣付くのは、後半部に出てくる「壯士遠出征、戎事將獨難」であろう。實際、その二句を根據として、この詩を曹丕の遠征と關連づけることが、從來から廣く行なわれてきた。⑥

そうであった可能性はもちろん否定できない。しかし、わたくしが不滿におもうのは、遠征中の曹丕に贈られたものであると指摘すれば、もうそれで充分事が足りたとされているように見受けられることである。ところがこの詩の場合は、現實に起こった出來事との表面的な對應關係をいくら詮索しても、それだけに終わるならば、あまり意味がない。そのことによって、詩に對する本質的な理解はほとんど深められないからである。

「其三」を現實の状況と對應する贈答詩であるとみなすのであれば、何よりも問われねばならないのは、それが同時に閨怨詩のスタイルをとったフィクション性の濃い詩でもあるということをどう理解するか、という問題ではなかろうか。

ところで伊藤正文氏は、「其三」の五～八句は、漢の班婕妤が讒言を被ったときに作ったとされる「自傷賦」（『漢書』「外戚傳」）の表現と照應すること、また全體的に見て楚辭の用語を多用すること、とりわけ、放逐された屈原の心情に思いをはせた作品といわれる宋玉の「九辯」の語句と發想を廣く取り入れていること、以上を主な根據として、「其三」は「閨怨の作の一種であり」、「女性に假託した劉楨の、曹丕に對する衷情を述べたもの」とした（「劉楨詩論

考」・『近代』五十一號・一九七六年)。

伊藤氏は「其三」を、女性に假託するという方法によって、自らの怨憤の情を相手に向かって間接的に吐露した作品と捉えるわけである。傾聽すべき見解であろう。劉楨はそこでもまた、對人性を正面に押し出すという當時の一般的な贈答詩の行き方とは異なる獨自な行き方、つまり、對人性を顧慮するよりも、自分自身のことをうたう方に重心が傾いた對自性の高い詩を、特定の相手に讀ませるということを行なっていることになるからである。(ただし、閨怨のスタイルをとったのは、直接的な自己表白にはありがちな露骨さを和らげるためとも理解される。とすれば、その點では、對人性への配慮があったとしなければならない。)

さて「贈五官中郎將四首」の「其二」と「其三」からは、上述のような贈答詩制作に對する劉楨の獨自な取り組み方が窺えるわけだが、それが最も尖鋭なかたちで示されているのは、なんといっても「贈徐幹」であろう。それは次のような作品である。

誰謂相去遠　誰か謂う相去ること遠しと
隔此西掖垣　此の西掖の垣を隔つるのみ
拘限清切禁　清切の禁に拘限せられ
中情無由宣　中情　宣ぶるに由無し
思子沈心曲　子を思いて心曲を沈め
長歎不能言　長歎して言う能わず
起坐失次第　起坐に次第を失い
一日三四遷　一日に三四たび遷る
步出北寺門　步みて北寺の門を出で
遙望西苑園　遙かに西苑の園を望む
細柳夾道生　細柳　道を夾みて生い
方塘含清源　方塘　清源を含む
輕葉隨風轉　輕葉　風に隨いて轉じ
飛鳥何翻翻　飛鳥　何ぞ翻翻たる
乖人易感動　乖人は感動し易く
涕下與衿連　涕下りて衿と連なる
仰視白日光　仰いで白日の光を視れば
皦皦高且懸　皦皦として高く且つ懸(はる)かなり

兼燭八絃內　兼ねて八絃の內を燭し
物類無頗偏　物類に頗偏する無し
我獨抱深感　我獨り深き感を抱き
不得與比焉　與に焉に比ぶるを得ず

ここで劉楨は、近くにいるのに會うことがかなわない友人に向かって、いま現在の自己の心情を赤裸々に吐露している。何焯はこの詩を、劉楨が曹丕の夫人の甄氏を平視して不敬罪に問われたとき（それは建安十六年の出來事とされる）の作とする（『義門讀書記』文選卷二）。何焯の說の蓋然性は高いと思われる。ここには、窮地に追い込まれた者のいかにも抱きそうな焦燥感や不安が、全篇に色濃く漂っている。これが生命の保證のない危機的狀況のもとで作られたとしても、少しもおかしくないであろう。また第十七句「仰視白日光」以下六句は、いうまでもなく曹操を念頭においた發言で、自分を見捨てることのないよう、間接的に曹操に訴え、その情にすがろうとしたものと解される。

制作時期の先後關係は不明ながら、作品の性格からいえば、「贈徐幹」はまさしく「其二」「其三」の延長上に位置づけられるべき贈答詩である。もはや贅言を弄するまでもなかろうが、この詩の中でも劉楨は、相手の徐幹についてはまったくといってよいほど觸れないで、ひたすら自らの心情を表白することに熱中しているからである。この詩がそのときに劉楨がおかれた特殊な狀況に密着した作品であることは間違いないが、しかし、受け手のこととなると、ほとんど完全に無視されているのだ。

「贈徐幹」は、「其二」「其三」以上に、贈り手側からの一方通行的な表現が支配的な作品だといえる。そこでは劉楨は、詩の樣式を用いて、自分自身を他者の前にさらけだしているのである。それはむしろ「告白」と呼ぶのが適切である。

それをせざるをえない、ぎりぎりの狀況に追い込まれたこと、そして、それを正しく受け止めてくれると作者が信頼できる友人がいたことが、劉楨をして贈答詩による「告白」を實現せしめることになったのだろう。[7] だがその根底には、對人性にあまり縛られないという、劉楨の贈答詩制作に對する獨自な姿勢があったことも忘れてはなるまい。

その同じ根から、あるときは「贈五官中郎將四首」の「其二」「其三」が生まれ、またあるときは「贈從弟三首」が生まれたわけだから。

＊　＊

贈答詩たるもの對人關係に資するというある種の實用性を正面に据えなければならない、そうした通念から劉楨は比較的自由であったことを、われわれは本章でも確認できたと思う。場合によっては劉楨は、贈答詩を、いま現在のかく在る自己を特定の相手に向かって提示するための手段としても用いているのだ。

ところでそのことは、詩歌史の大きな流れのなかで捉えるなら、おおよそ次のように理解できるのではなかろうか。

周知のごとく、劉楨が生きた後漢末期は、一言でいえば、詩歌史が初期の段階からようやく大きな飛躍をとげようとしていた時期であった。すなわち、それ以前に確立されていた詩歌の世界はまだきわめて狹く、詩歌ジャンル自體は未開拓の餘地の多い可能性に富んだ領域であったが、後漢末期こそは、その豐かな可能性がさまざまな實踐によって切り開かれはじめた時期に當たっていた。そうした時期、特に建安年間後期において、贈答詩の制作が急に盛んになっているのは、決して偶然ではない。贈答詩こそは、新しい表現世界を切り開くのにきわめて有利な條件を備えた詩歌スタイルであったからだ。とりわけ、特定の相手によって享受されることが保證されている個人的享受形態に屬する贈答詩ならば、相手との親密度あるいは理解度の深さに比例して、制作者が詩表現上のさまざまな慣習や制約から自由になれるというのは、道理であろう。

劉楨の功績は、つまるところ、贈答詩という詩歌スタイルがはらんでいた可能性を、實踐の場で試してみたことにあるといえよう。その意味で、劉楨はまさに時代の先端を切り開いていたわけで、そうした劉楨の贈答詩に對する新しい取り組みは、高く評價されなければなるまい。そうした果敢さ、大膽さ、あるいは、從來の傳統に對するとらわれのなさこそは、詩人劉楨を特色づける最大の要素であり、まさに「偏人」の面目躍如たるところであろう。

だが、いうまでもないことだが、それは意氣込みだけで實現できるようなことではなかったはずだ。可能性を具體化するための方法の開發が、なんといっても不可缺である。では劉楨が開發したのはどのような方法だったのか、われわれはやはり、その問題を避けて通るわけにはいかない。

ただし、「贈從弟三首」については、すでにある程度觸れたつもりである。確實にいえると思うのは、そこでの方法の基本は樣式性を高める點にあったということである。その結果として、作品は、實體としての受け手と贈り手を無化する方向へと傾斜していったと思われる。かくして作品の自律性が高まり、贈答詩であることすら自ら否定するところにまで到達しかねない（その方法を受け繼いだ贈答詩が出にくかったのも、理由のないことではなかったわけだ）、そうした作品であることによって、「贈從弟三首」なかんずく〈其二〉は、時代を越えて讀まれ續けてきたのであろう。

また「其三」の方法についても、基本的なところは、すでに伊藤氏によって解明されたとみなしてよかろう。すなわち、まず枠組みとして閨怨詩の樣式をとるということが指摘できるわけだが、それが同時に、間接的な自己表白ともなりえ、その結果、贈答詩として一定の機能をはたすにいたっているのは、主にその使用語彙の工夫によるものであることが、說かれていた。

しかし、「其二」「贈徐幹」についてはまだ、充分に明らかにされているとはいいがたい。というより、そこでの方法は、「贈從弟三首」や「其三」ほど見えやすくはないのだろう。たとえばそれらが、「贈從弟三首」「其三」とくらべて樣式性が低いということは確かである。とらわれのなさが「其二」「贈徐幹」の方法であったといえるかもしれない。だが、そうしたなかにもやはり、何らかの方向性のようなものはあったはずだ。最終章では、その點に關して若干氣の付いたことを述べてみたい。

四　「其二」と「贈徐幹」の方法

さて、「其二」については先に、作者の日常生活にかかわる私的な事柄を取り上げているところに、その大きな特徵があると書いた。そのことが「贈徐幹」にもほとんどそ

のまま當て嵌まることは、容易に首肯されるであろう。たとえば、冒頭で「誰謂相去遠、隔此西掖垣。拘限清切禁、中情無由宣」と、その時の自らの置かれた状況を、ごく素直にうたっているところなど、作者自身の個別的體驗を具體的に述べたよい例である。一方「其二」の冒頭にも、「余嬰沈痼疾、竄身清漳濱。自夏涉玄冬、彌曠十餘旬」という句があった。私信の一節をおもわせるこうした表現に、劉楨の方法の一端が示されていることは疑えない。

ところで、そうした點に着目するとき、『文選』卷二十九に「雜詩」として收められる劉楨の次の作品は、はなはだ注目に値するものではないだろうか。

職事相塡委　職事　相塡委し
文墨紛消散　文墨　紛として消散たり
馳翰未暇食　翰を馳せて未だ食するに暇あらず
日昃不知晏　日の昃(かたむ)くも晏むを知らず
沈迷簿領書　簿領の書に沈迷し
回回自昏亂　回回として自ら昏亂す
釋此出西城　此を釋きて西城より出で
登高且遊觀　高きに登りて且く遊觀す
方塘含白水　方塘　白水を含み
中有鳧與鴈　中に鳧と鴈と有り
安得肅肅羽　安くにか肅肅たる羽を得て
從爾浮波瀾　爾に從いて波瀾に浮かばん

注目すべきは、いうまでもなく前半の六句、膨大な文書の山を前に、食事の時間もままならず、終日事務處理に追い回される宮仕えの憂鬱な日常をうたっているところである。こんな例が、他の建安詩人の作品の中にはあるだろうか。劉楨の大膽さに、あらためて驚かされるわけだが、ひるがえって考えれば、これに近い例として、劉楨自身に、先に擧げた「其二」「贈徐幹」の冒頭のごとき表現があることを、われわれはもはや見逃さないであろう。劉楨詩の中に置いてみるなら、「雜詩」の表現は決して孤立的なものではないのだ。

ただ、それにしても、建安詩全體から見て、これがとび抜けて特異な例であることに變わりはない。なぜこのような作品が存在しえたのか、という疑念はやはり拭いきれな

い。だが、假にこの詩もまた、元來は贈答詩として作られたのであったとすれば、理解は比較的容易になるのではないだろうか。誰か特定の親密な相手を享受者とする贈答詩であれば、その人に向かって、このところの多忙さを愚痴るということは、「其二」や「贈徐幹」を殘している劉楨ならば、いかにもやりそうに思われるからだ。詩の後半の表現も、そうした假說を敢て拒むものではないであろう。

もちろんそれは憶測の域を出るものではない。しかし、そうした憶測があながち的外れとは感じられないほどに、「雜詩」と「其二」「贈徐幹」とは接近している。少なくとも、「雜詩」の前半の表現に、「其二」「贈徐幹」の方法が極端化されたかたちで示されていると考えることは許されるであろう。すなわち、劉楨は「雜詩」のなかに、詩歌文學では取り上げることがはばかられる、普通は書簡文で扱われるような身邊瑣事を、あっさりうたいこんでしまっているわけだが、そこに行き着く一歩手前の段階にある表現として、「其二」「贈徐幹」の例を位置づけることができると思う。

なお、「雜詩」の前半六句については、その使用語彙についても、注意を拂う必要がある。というのはそこでは、「塡委・沈迷・簿領」といった、詩歌文學ではふつう見かけないような語彙が使われているからである。もっとも詩歌以外に視野を廣げてみると、「塡委」と「簿領」については、時代はかなり後のものではあるが、參考になるかもしれない次のような用例が目に留まった。

四方の表疏・當局の簿領の詳を諮り斷を請わんとして前に塡委する每に、昇は辭を屬りて紙に落とし、事を覽て議を下し、縱橫敏贍、暫くも筆を停めず、頃刻の間に、諸事便ち了りぬ。(『南史』「朱昇傳」)

「簿領」が、役所の文書事務にかかわる無味乾燥な語彙であることは容易に推察されるが、「塡委」もまた、主にそうした役所仕事と結びつく、使用場所の限定された語彙であった可能性を、この例は示唆していないか。[8] 當然のことながら『文選』には、劉楨「雜詩」以外に「塡委」の用例はない。「塡委」(および「簿領」)が雅ならざる語彙であったことは、まず間違いない。

素材の選擇のみならず、その語彙の選擇においても、「雜詩」は、當時の詩歌の通念からかなり外れる作品であったといえそうである。

ところが伊藤氏によれば、「贈徐幹」の場合も、先例のない新用語が多數見出されるという（「劉楨詩論考」）。すなわち、「拘限・清切・輕葉・乖人・深感」がそれである。また、「其二」においても、「沈痼・彌曠・情眄・望慕」は、おそらくは劉楨の新用語であり、劉楨以後も當分の間は、詩歌の中で使われることは稀な語彙である。

これははなはだ興味深いことといわねばならない。語彙レベルでも、「雜詩」と「其二」「贈徐幹」との間には共通性が認められるのだ。

徵すべき作品の數が少ないという事情を考慮しても、常套的な語彙の使用だけでは滿足しないという傾向が、劉楨の贈答詩を特徵づけているということは、否定しがたい事實といえよう。それは、おのれ自身の個別的な體驗や感じ方をできるだけ類型化しないで表現するために、劉楨が意識的に選び取った方法であると、理解してよいのではなかろうか。

それと關連して、わたくしは、「其二」「贈徐幹」の敍景表現にも注目しないではおれない。それは次のような表現である。

素葉隨風起　素葉　風に隨いて起こり
廣路揚埃塵　廣路　埃塵を揚ぐ　（「其二」）

細柳夾道生　細柳　道を夾みて生い
方塘含清源　方塘　清源を含む
輕葉隨風轉　輕葉　風に隨いて轉じ
飛鳥何翻翻　飛鳥　何ぞ翻翻たる　（「贈徐幹」）

これらはいずれも、氣持ちのたかぶりのなかで主體が目にした情景として提示されるもので、感情を頂點へと導いていく重要な契機となっている。すなわち、これらの敍景表現に引き續いてうたわれているのは、「其二」では「逝者如流水、哀此遂離分」、「贈徐幹」では「乖人易感動、涕下與衿連」という、いわば兩詩のメイン・テーマであった。もっとも、感情表白へ移るための橋渡しとして外界の景物

に視線を轉じるという技法自體は、建安詩人にとってはすでに、特別に目新しいものではなかった。けれども、劉楨のこれらの敍景表現の中身について考えるなら、當時にあってはやはり、斬新な例であったといわなければならない。

まず注目されるのが、そこでもまた、一見どこにでもあるような、平易な、しかし、詩歌文學の世界ではまだその位置づけが定まっていないと推測される語彙が多用されていることである。すなわち、「其二」の「素葉」、「贈徐幹」の「細柳・方塘・輕葉」は、未だ特定のニュアンスが付與されていない、いわば白紙の状態にある語彙だと思われる。また、「贈徐幹」の「飛鳥」は、建安詩人が好んで用いる語彙ではあるのだが、幅廣く用いられているところからして、固定したイメージとの結びつきはほとんど考えられないから、はじめに擧げた語彙と矛盾するものではないと認めてよいであろう。

ただ、「其二」の「廣路」については、伊藤氏が指摘するとおり、「古詩十九首・其十三」に、「白楊何ぞ蕭蕭たる、松柏廣路を夾む。下に陳死の人有り、杳杳として長暮に即く」という先例がある。「其二」の文脈からしても、この敍景表現から、死のイメージが連想されることは否定できない。しかし、そのことをあまり强調しすぎても、肝賢な點を見失うことになるのではないか。それはそれとして、もっと重要なのは、「素葉風に隨いて起こり、廣路埃塵を揚ぐ」という詩句が喚起する映像の確かさだからである。その映像性の高さは、たとえば「古詩十九首」の「廣路」を用いた句——特定の觀念との結びつきの强さに注意しよう——などとはくらべものにならない。そのことを見落としてしまったならば、「其二」の鑑賞はきわめて不十分なものになってしまうであろう。

それは「贈徐幹」の敍景表現においても同様である。そこに繰り廣げられるのもまた、なにはさておき、一場の鮮かな映像なのだ。劉楨がそこで、固定した連想に結びつきにくい、白紙の状態にある語彙を選擇しているのも、結局は、自らのオリジナルな映像を創出するためであったと理解しなければなるまい。

そうした映像を享受者の前に差し出すということがまた、

「其二」「贈徐幹」の方法であっただろう。

だが、そうであったとして、劉楨は自らの映像にいかなる價値を認めて、それを相手に差し出すのだろうか。

そのことを考えるうえで、はなはだ興味深いのが、同じ時期に作られた公讌詩に見える次のような敍景表現である。

嘉木凋綠葉　嘉木には綠の葉凋み
芳草纖紅榮　芳草には紅の榮纖し　（陳琳「遊覽」）

芙蓉散其華　芙蓉は其の華を散らし
菡萏溢金塘　菡萏は金塘に溢る　（劉楨「公讌詩」）

明月澄清景　明月　清景を澄え
列宿正參差　列宿　正に參差たり
秋蘭被長坂　秋蘭　長き坂を被い
朱華冒綠池　朱華　綠の池を冒う
潛魚躍清波　潛魚　清き波に躍り
好鳥鳴高枝　好鳥　高枝に鳴く　（曹植「公讌詩」）

これらは、映像性の高さということだけならば、劉楨の「其二」「贈徐幹」の例にそれほどひけをとらないのではないだろうか。しかし、少なくとも以下の點で、「其二」「贈徐幹」の敍景表現とは對照的である。

まず、素材として、美的な對象が嚴選されていることは説明を要しないであろう。語彙については、そのままではニュートラルな「木・草・塘・景・波・鳥」等には、美的價値を付與する語を冠して、「嘉木・芳草・金塘・清景・清波・好鳥」としているのが目につく。また、句レベルでは、對句の形式に構成しなおして、美を强調している……。

公讌詩の敍景が提示する映像の價値は、要するに、〈美〉にあったといえる。

だが、〈美〉にはなぜ價値があるのか。簡單に答えられる問題ではないのだが、詩歌史の展開を辿っていくとき、〈美〉がきわめて高度な普遍性を備えている點に大きな意義があったということに着目しないわけにはいかない。一般論としていえば、〈美〉ほど、時代や地域や階層を越えて、廣範な人間の共感を喚び起こせるものはない。建安年間は、〈美〉の價値が深く認識され、それがはじめて意識

的に、文人集團の文學活動の基本に据えられた時代であったが（『典論』「論文」の「詩賦欲麗」を想起しよう）、その主要な理由のひとつは〈美〉の有する普遍性にあったと考えられる。

これら公讌詩の敍景表現との對比によって、「其二」「贈徐幹」の敍景表現の特異さがいよいよ際だつことになるであろう。そこでは何らかの色付けをするような形容語の使用は極力抑えられ、對句形式もまったく採用されていない。描き出されるのは、いってみれば、いかにもありそうな、ありふれた情景なのだ。これはいったいどういうことなのか。公讌詩の例とくらべると、作者はまるで自らの敍景に、詩表現として認知されるのに必要な價値を付與することを、頑なに拒んでいるみたいではないか。

いや、まさにそのとおりなのである。讀者の前に差し出された映像に、詩表現としての價値があらかじめ付與されているのではないのだ。にもかかわらず、なぜそうした映像が差し出されるのかといえば、結局のところ、作品世界で主體がそうした映像に心を動かされたとする一事を措いてあるまい。（「贈從弟三首」〈其二〉の「松」のように、比興性に映像の價値が求められているとは考えられない。）主體の眼差しが示されているといってもよい。映像の確かさが希求される所以である。作者の期待は、だから、享受者によって主體の眼差しが共有されることだ。それは、作者の感性が受けとめられることにほかならない。そのときはじめて、映像にある價値が生じる。それこそが、獨自な敍景表現にかけた、劉楨の企圖ではなかっただろうか。

＊　＊

よく知られているように、『詩品』上品では、劉楨を、「氣に仗りて奇を愛す」と評している。[9] だが、鍾嶸は、何をもって「奇を愛す」といったのか。われわれが本稿で試みたのは、劉楨が執着した「奇」が何であったのかを、作品に卽して檢證する作業であったともいえよう。その際、わけても贈答詩のなかに、「奇」の諸相が確認されるわけだが、そのことはすこしも異とするに足りない。「奇」なる要素に富む詩歌作品を受けとめうると期待される享受者は

おのずと限定されざるをえないが、その點からみて贈答詩の有利さは歴然としている。

さてこそ劉楨は、贈答詩においてしばしば、その發生の當初から一貫して他者との連帶を大原則としてきた詩歌文學の傳統的な在り方から自由でありえた。他者に手を差し伸べて連帶を求めるよりも、作品としての自律性の追究、あるいはひたむきな自己提示、はなはだしきは告白を、劉楨は贈答詩によって行なっているのである。その先にはもう、他者との斷絶の自覺に立つ詩――たとえば獨白（モノローグ）としての詩――が見え隱れしている。そこに到達することによって、詩歌史はひとつのピークをきわめるはずだ。

もちろん、文人集團としての文學活動にアイデンティティを求めざるを得なかった建安詩人の一人である劉楨に、そこまでの要求をするのは無理な話ではある。しかし、劉楨が「奇を愛し」たことによって、詩歌史の轉換を促すひとつの齒車になりえたことは疑えない。それもまた、稀有な個性と贈答詩という新興の詩歌ジャンルとの、ある意味では幸福な出遇いがあったからにほかならないのである。

註

① 拙稿「建安詩人による送別の贈答詩について」（『日本中國學會報』第四十一集・一九八九年）および「建安年間後期の曹植の〈贈答詩〉について」（『中國文學報』第四十二册・一九九〇年十月）

② 劉楨に對する從來の評價については、王運熙「談前人對劉楨詩的評價」（『古代文學理論研究』第十四輯・上海古籍出版社一九八九年十二月）參照。

③ 沈德潛『古詩源』（卷六）；「贈人之作通用比體、亦是一格。」

④ たとえば李南岡氏は、『漢魏六朝詩鑑賞集』（人民文學出版社一九八五年）所收「劉楨《贈從弟》（其二）賞析」で、「この詩は詩題からすれば明らかに贈答詩であるが、詩の題材や表現形式からいえば、詠物詩とみなすべきである。」といい、方明光氏も『古詩海』（上海古籍出版社一九九二年一月）で、〈其二〉の詠物性を重視した解釈を展開している。

また、川合康三氏は、『鑑賞中國の古典・文選』（角川書店一九八八年）で、〈其二〉について次のようにいう。「詩題を見ると確かに贈答詩であるけれども、詩の内容そのものは、もっぱら松だけを詠じたものであって、のちの齊梁の時期に盛んに起こる「詠物詩」と同じ體裁といってよい。もっとも、南朝の宮廷で行なわれたそれが、室内外の物の描出に手並みを競い合ったのと異なり、この松は明らかに人物の比喩として描かれている。そして詩の本文は詩題と相俟って、從弟の

人格、ないしは從弟にかくあれかしという人格を、言おうとしていることが了解されるのである。」

⑤ 鈴木説で有力な根據とされるのは、第二十句「貽爾新詩文」である。すなわち鈴木氏は、そこにある「爾」という二人稱代名詞に着目し、それが曹丕に向かって用いられているとするなら、それは狎れ親しみ過ぎていて不自然であることを、他の用例をも示しつつ强調した。

それに對して伊藤正文氏は、まず王粲「雜詩」の「徘徊不能去、佇立望爾形」を反證として擧げ、それは曹丕「芙蓉池作」に應じたものであって、そこでの「爾」は曹丕を指していると考えられるから、劉楨が「爾」を曹丕に對して用いても問題にはならないと、鈴木説に反論を加えた（「劉楨詩論考」・『近代』五十一號・一九七六年）。

この伊藤氏の反論は、しかし、成立しにくいと思う。というのは、王粲のその詩は、普通は、曹丕の詩に應じたのではなくて、曹植「贈王粲」に答えた作品であると考えられているのだが、それはともかくとして、そこでの「爾」が實は、直接曹植に向かって呼び掛けたものではなくて、直接的には樹上に獨り巢くう鳥に向かって發した言葉であるからである。

また伊藤氏はさらに、第八句「步趾慰我身」の「步趾」が、『左傳』昭公七年の「今君若步玉趾、辱見寡君……」に由來する語で、「步趾」の主體が魯君を指すところから、「步趾」は曹丕に對して使われるべき語であると主張したが、これも確實な反證にはなりにくいように思う。

というのは、わたくしは、わずかに時代は下がるが、應璩「與侍郎曹長思書」（『文選』卷四十二）に、「幸有袁生、時步玉趾、樵蘇不爨、清談而已。」（幸いに袁君が時折、立ち寄ってくれます。でも、食事のもてなしはせず、俗世を超越した話をするばかりです。）とある方が、當時の「步趾」の用法を知るうえでは、より重要だと考えるからである。書簡の中で應璩は、「步趾」を、自分とは對等以下の友人が自分を訪問してくれたことをいうのに用いている。「步趾」という語は確かに、元來は『左傳』に基づくのだろうが、それは時代の經過につれて一種のインフレーションをおこしているわけである。そのことは自體は、言語にとって別段珍しい現象ではない。言葉の出典を確かめることはもちろん大切だが、言葉が生き物であるかぎり、柔軟な對應が必要であることを示す、これはひとつの例になるかもしれない。

⑥ 李善は「其三」を、曹丕が孟津に駐留していたとき（建安二十年）の作とする。

⑦ この詩に答えたと推定される徐幹の詩が、冒頭の八句だけではあるが、『藝文類聚』卷三十一に收められている。

與子別無幾	子と別れて幾(いくば)くも無く
所經未一旬	經る所未だ一旬ならざるに
我思一何篤	我が思い一に何ぞ篤き
其愁如三春	其の愁は三春の如し

雖踏在咫尺　路は咫尺に在りと雖も
難涉如九關　涉り難きこと九關の如し
陶陶朱夏德　陶陶たる朱夏の德
草木昌且繁　草木　昌んにして且つ繁し

⑧ さらに時代が降ると、『舊唐書』「王播傳」にも、「(王播)天性勤於吏事、使務塡委、胥吏盈廷取決、簿書堆案盈几、他人若不堪勝、而播用此爲適。」と見える。

⑨ 『詩品』における批評用語「奇」の重要性については、興膳宏氏「『文心雕龍』と『詩品』の文學觀の對立」(『吉川博士退休記念中國文學論集』一九六八年、のち『中國の文學理論』筑摩書房一九八八年に收錄)參照。